

「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」（九州・沖縄ブロック）

開 催 報 告

I 概要

I 主催

宮崎県、文部科学省

2 テーマ

宮崎発！「いつでも、どこでも、誰でも学べる」持続可能な共生社会を実現するために

3 日時

令和4年1月22日（土） 午前10時から午後3時まで

4 配信会場

宮崎県教育研修センター

① 配信方法

Zoom ミーティング

② 情報保障

手話通訳の画面表示、Zoom アプリを用いた字幕表示

③ 他の接続拠点

文部科学省（施策説明時）

④ プログラム

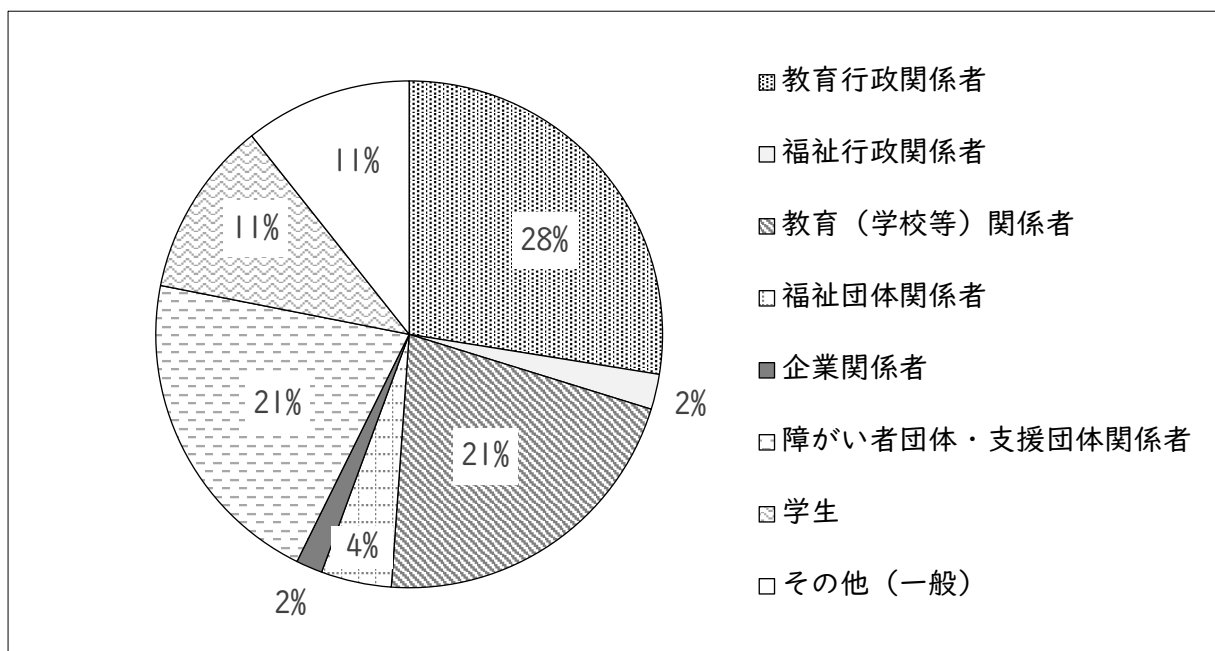
10:00-10:10	オープニング	開会のことば(県教育庁生涯学習課) スペシャルビデオメッセージ(有森 裕子氏)
10:10-10:30	施策説明	文部科学省の取組(障害者学習支援推進室) 宮崎県の取組(教育庁生涯学習課)
10:35-10:55	経過報告Ⅰ	障害者自立応援センターYAH!DOみやざき(宮崎市)
10:55-11:15	経過報告Ⅱ	霧島おむすび自然学校・小林市社会教育課(小林市)
11:15-11:35	経過報告Ⅲ	日向市地域福祉コーディネーター連絡会(日向市)
11:35-11:50	県内団体活動紹介	ライフカンパニー新富～南九州大学野村研究室～ 延岡市地域活動支援センターみなと～株式会社グローバル・クリーン ～宮崎わたぼうし会～スペシャルオリリンピックス日本・宮崎～ NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク
13:00-13:40	取組推進校発表Ⅰ	日南くろしお支援学校(谷川 佳雅 教諭)
	取組推進校発表Ⅱ	都城きりしま支援学校(那須 直実 教諭)
13:50-14:50	トークセッション	「障がいの有無に関わらず誰もが学び、生きやすい社会を目指して」
14:55-15:00	クロージング	総括・あいさつ(清武せいりゅう支援学校 校長 横山 貢一)

5 事後

- ① 参加者アンケートの実施・回収
- ② 県生涯学習課 HP「みやざき学び応援ネット」更新
- ③ 宮崎県教育情報テレビ「みらい・みやざき まなび隊」放送

II コンファレンスの実際

I 事前参加申込数



- * 事前申込者数は178名、うち50%が教育行政関係者、教育（学校等）関係者
- * 申込時に確認できた県外からの申込者数は16名（約9%）
うち6名が九州、10名が九州外から

2 当日の参加者数

【Zoom ミーティング上でのプログラムごとの参加者数（いずれもピーク時の数）】

午前		午後	
オープニング	105	取組推進校発表	102
施策説明	107	トークセッション	105
経過報告	120	クロージング	100
県内団体活動紹介	117		

- * Zoom ミーティング上での参加者数のピークは、午前120、午後105
- * 九州保健福祉大学に17名、延岡市地域活動支援センターみなとに12名、南部教育事務所に1名それぞれの会場に集まって視聴
- * 宮崎の配信会場での参加者数は、19人（委員2・登壇者1・事務局16）

3 経過報告の概要

(1) 経過報告 I

団体名	NPO 法人障害者自立応援センターYAH!DO みやざき
報告題	共生社会の実現に向けた生涯学習支援 ～障害のある人の学びと交流の場所を作る～
報告者	副理事長 山之内 俊夫 氏
概 要	障がい者本人の「やりたいことリスト」を専門学校生とともに実践する為に、まずは知り合うための交流会を実施した。障がいの有無にかかわらず、皆が楽しみながら主体的に関わることで、持続的な学びと交流の場が広がり、「共生」の実現につながる事が報告された。

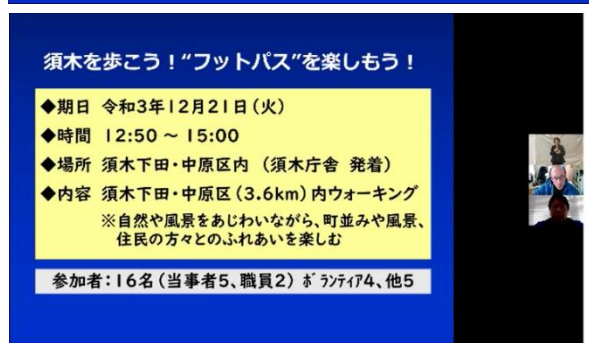
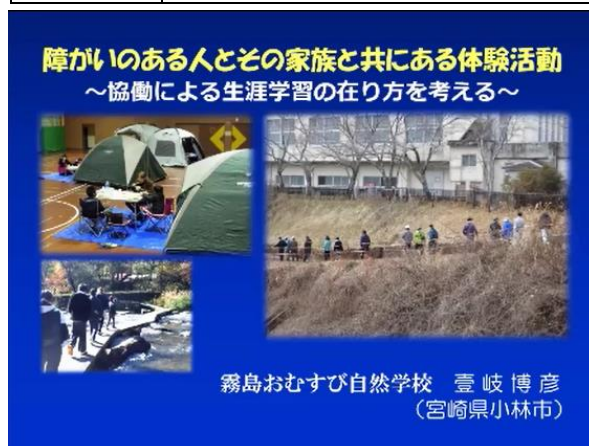


【参加者から】

- * 障がいのある方の「やりたいことリスト」を実現するために企画・行動されていることが素晴らしい。
- * 「人間関係の豊かさが人生の豊かさ」とあったように、障がいのある、なしに関わらず、人とのつながりが大切であると改めて感じた。
- * 学生とYAH!DOみやざきの方が出会って、どう関わっていいか戸惑い、目標設定を考え直したことで、まずは互いを知るための交流会と食事会。結果より話し合う過程を大事にしたことに意味があり、互いの学びになったのではないかな。
- * 「自分がやりたいことを実現する場所」を目指す、「リーダーシップを取り戻したい」、魂の叫びのような力強いメッセージ、「障がい者のことは障がい者が一番知っている」共感性の高い皆様の言葉には説得力があった。

(2) 経過報告Ⅱ

団体名	霧島おむすび自然学校・小林市社会教育課
報告題	障がいのある人とその家族と共にある体験活動 ～協働による生涯学習の在り方を考える～
報告者	代表 壹岐 博彦 氏・主幹 戸高 明廣 氏
概要	ポン太クラブとの「民間団体同士」の協働活動として「防災プチキャンプ」を、小林市社会教育課との「民間団体と行政」の協働活動として、「フットパス」を実施した。今後、持続的に実施していく上での成果や課題について報告された。



【参加者から】

- * 他の機関と協働で学びの機会を広げていく取組が、とてもいいと思う。計画段階で、蜜に連絡を取り合ったりさまざまな想定が必要になったりして、団体単独で行う活動よりも時間がかかるが、こういう一つ一つが大事だと思った。
- * 市民向けの生涯学習講座が、障がいのある方々のニーズや要望に応えられていない点に着目し、講座の一つとして実施したことが非常に参考になった。これは、他の自治体でも同様な取組が実現可能であると思う。
- * 行政や様々な団体との良好な関係があってこそその充実した活動だと感心した。同じような活動をするところが県内に増えていくことを期待したい。
- * 発表で、実施主体が不明確の為に進まなかった様子が伝わってきた。そこがリアルな課題。今回の取組を通して、そこがひとつ進むと、社会教育という生涯学習活動の宝庫に障がいのある人が入れるきっかけとなることを期待したい。

(3) 経過報告Ⅲ

団体名	宮崎県コンソーシアム連携協議会 北部地区委員
報告題	「実践 × 想い」 ～県北地区の Challenge!～
報告者	地域福祉コーディネーター 成合 進也 氏
概要	県北地区の具体的実践プランを作成するために、県北地区のメンバーで「障がい児・者の学びの機会を阻害するもの(地域社会の課題)は何か」と想いを出し合うミーティングを実施した。さらに委員一人一人の Action plan から生まれた実践が報告された。



2022.1.22 令和3年度 共に学び、生きる共生社会コンファレンス(九州・沖縄ブロック)
『Let's try it!!』～経過報告～

「実践×想い」
～県北地区のChallenge!～

報告者：地域福祉コーディネーター 成合進也



令和3年度県北地区実践

実践2 県北メンバーによるZOOMミーティング開催！



□3つの「問い」で、意見を事前整理
問1「やってみよう」、「やりたいこと」、「できること」、「やるべきこと」
※全員一人ひとりの課題に対する考え(意見・想い)
問2 障がい児者の学びの機会を阻害するもの(社会の課題)何？
※問1をやりつらしている原因・要因・社会的背景は？
問3「だったらどうする？」
※問2を突破するために、私は？(住民は？事務局は？行政は？)具体的に何をやる？
メンバー間の本音トーク！
想い合わせ、実践課題の把握(共有)実践プランニングの素材集め！

県北ブロックMeeting
令和3年11月4日 14:00～15:30
委員、事務局関係者 10名参加

ゴール設定
県北地域における具体的実践プランの作成に必要な材料(素案)を集める！

令和3年度県北地区実践

実践4 Actionplanの実践！



地域福祉meeting 企画・開催！

【参加者】25名
□福祉関係者
□消防団
□障がい当事者・家族
□teとまの会

令和3年11月30日(火)19:30～21:00 亀崎中区公民館

目的(何のために…)
地域関係者が
▷地域に暮らす障がいのある人や家族の想いや日常生活の状況を知る
▷災害も含めた日常からの地域の支え合いについて考える
▷地域関係者の想いを出し合い、相互の関係づくり




【参加者から】

- * 障がいのある人が集って食事を作り食べる。いい企画だと感じた。
- * 子どもの時期から障がいのある人にかかわる、共生社会の担い手を育てる、という視点は重要だと感じた。
- * 地域福祉 meeting が印象に残った。その場に参加された方々の熱意にも心を打たれた。消防団等地域の方々を巻き込んで防災に関する計画を立案することは非常に大事で、モデルケースとして全国に発信する意義の大きさを感じた。
- * “住民としてできること”という言葉がとても印象に残った。普段は公的に満足なサービスを受けられていても、緊急時など、地域の人々との関わりは必要となる。地域住民や行政を巻き込んだ連携づくりなどは、モデルになる素晴らしい取組だと思った。地域での関わりが増えれば、障がいのある人もない人も出会う機会が増えて豊かな人生の構築につながっていくと感じた。

4 県内団体活動紹介の概要

紹介団体	○ ライフカンパニー新富 ○ 延岡市地域活動支援センターみなと ○ 宮崎わたぼうし会 ○ NPO法人五ヶ瀬川流域ネットワーク	○ 南九州大学野村研究室 ○ 株式会社グローバル・クリーン ○ スペシャルオリンピックス日本・宮崎
------	---	---



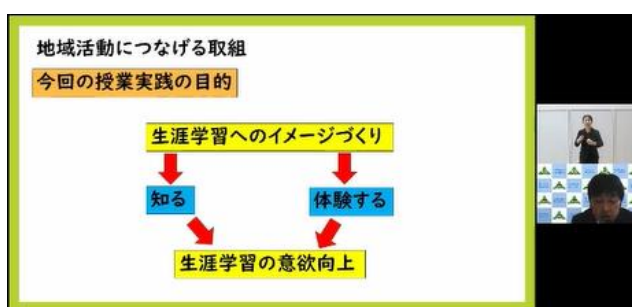
【参加者から】

- * 自分たちの取組を積極的に広報することで、他の団体の刺激や参考になる。
- * 様々なツールや場を使って広報していくことが効果的である。
- * さまざまな団体の活動を見て胸が熱くなった。
- * 県内には素晴らしい団体がたくさんあると改めて感じた。取組がもっとPRされ、多くの人の目に留まれば、障がい当事者も参加しやすくなり、ボランティアで参加したいという人たちも増えると思う。
- * このような団体の情報がより広く周知される仕組みがあるとよい。もったいない。

5 県内特別支援学校実践発表の概要

(1) 取組推進校発表Ⅰ

学校名	宮崎県立日南くろしお支援学校
発表題	「地域活動につなげる取組」
発表者	教諭 谷川 佳雅 氏
概 要	日南くろしお支援学校の卒業生が中心となって地域で活動している「かがやきエイサー」との学習を通して、学校卒業後の生涯学習へのイメージをつくり、卒業後の余暇活動や社会参加について生徒の生涯学習の意欲向上を図る取組が発表された。



【参加者から】

- * 学校が地域とつながって取り組む大変素晴らしい内容。他の支援学校のモデルとなる。
- * 従来の「地域活動につなげる」取組を発展させ、「卒業後の地域活動」に向けた取組（「知る」「体験する」）のプロセスを具体的に知ることができた。
- * 地域の素晴らしい資源を活かした体験活動。卒業生の生き生きした姿を見て、卒業後への希望や、夢を見出した子もいたと思う。
- * 生徒への調査と生徒がイメージしやすい取組をされていて、素晴らしい。生徒が先輩の活動を知って、「自分もやってみたい」と感じるということが素敵だ。
- * 障がいの有無に関わらず、地域の中で自分らしく人生を謳歌できる社会になればいいと感じた。

(2) 取組推進校発表Ⅱ

学校名	宮崎県立都城きりしま支援学校
発表題	「食育に関する取組」
発表者	教諭 那須 直実 氏
概 要	大学教授を招き、「食品を通して人々の健康を考える」講義を受けた後、管理栄養士の先生から実際に味噌づくりを学ぶという体験を通して、学校卒業後の生涯学習への意欲向上を図るだけでなく、地域の活動への参加についても広がりが見える取組が発表された。

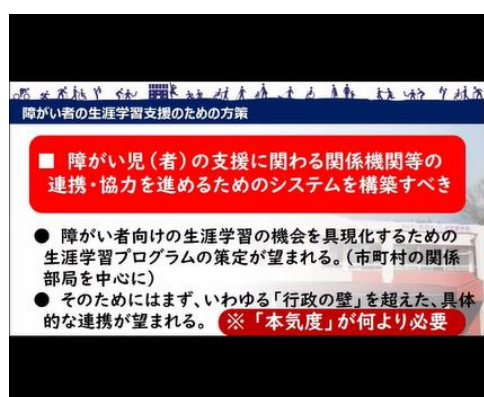


【参加者から】

- * 児童生徒の関心が高い「食」に着目して取り組んだ素晴らしい内容。地域の団体や活動を調査し、それを学校の教育活動に上手く融合されていた。他の支援学校のモデルになると思う。
- * 地域の外部講師の方を呼んで授業を行うことの意義は、その場だけで終わらずに、今後のさらなる学びへの広がりができることだと感じた。
- * 食育をすることで、「大学へ行く」「大学という学びがある」「大学に市民講座がある」などを知ったことが感動的。次へつながる、可能性が広がる感じがした。
- * 卒業後を見据えた授業の一環として、具体的に食育に的を絞った授業を取り入れることは参考になる良い取組だと感じた。

6 トークセッションの概要

テーマ	「障がいの有無に関わらず誰もが学び、生きやすい社会を目指して」
コーディネーター	柳田 哲志 氏（UMKテレビ宮崎）
登壇者	森 愛実 氏（NPO 法人障害者自立応援センターYAH!DO みやざき） 後藤 海翔 氏（専門学校） 川越 浩司 氏（宮崎県立都城きりしま支援学校） 井上 あけみ 氏（NPO 法人ライフカンパニー新富）



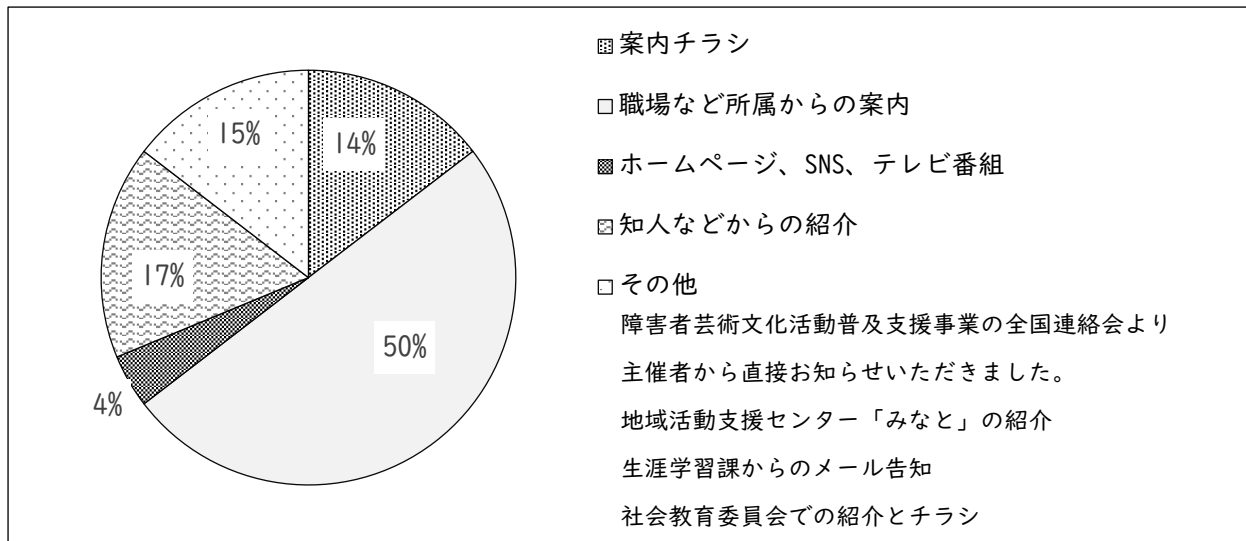
【参加者から】

- * 森さんがにこにこして、発表をされているところが素晴らしい。毎日、前向きに過ごされているのを感じた。話を聞いてこちらにも前向きな気持ちになった。
- * 後藤さんの「今まで周りの人から支えられたので、これからは支える人になりたい」という言葉に将来の宮崎県を支えていく素晴らしい人物だと感じた。
- * 社会は、行政は、何をしたいのかを熟議する必要があると思う。そのためには、教育行政だけではなく、福祉部局等の実情も踏まえたセクションもあると話が立体的、現実的になると思った。
- * 学校現場を含め、障がいのある方への支援体制は充実しつつあるが、それにより差別化が助長され分離教育となっているとのことであった。これについては、共生社会の実現に向けて、大きな課題となると感じた。

7 参加者アンケート

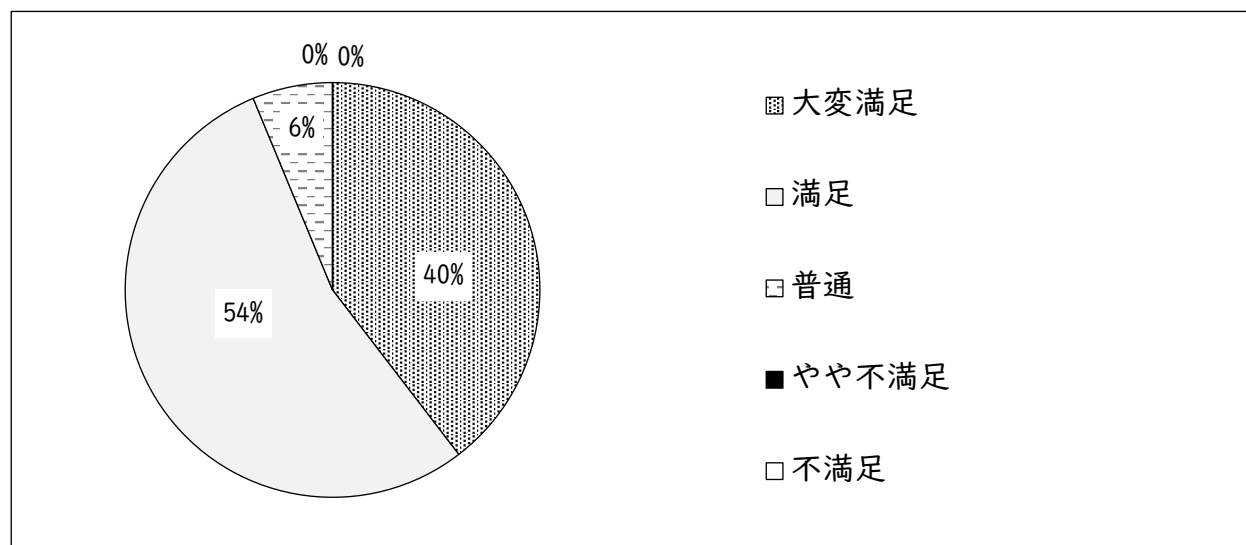
(1) 回答数 48 (入力フォームによる回答)

(2) コンファレンスをどのように知ったか



- * 半分以上が「所属からの案内」でこれまでの案内方法で一定の効果がある。
- * 参加者の属性から見ても教育関係者が多い(約5割)。福祉関係者等への広報が課題である。
- * 昨年(0%)に比べHP、SNS、テレビ番組が4%と微増した。YouTube、ラジオなどの効果か。
- * 次年度は、「共生社会」から距離のある人への広報の在り方を検討したい。

(3) コンファレンスの満足度



- * 回答者の90%以上が「大変満足」「満足」と回答している。

(4) 本コンファレンス全体を通して

- * 初めて参加したが、得るものがとても多かった。多くの方に、後からでも視聴していただきたい。
- * 非常に充実した、中身の濃いコンファレンスだったと思った。正直なところ、圧倒された。
- * 共生社会を詳しく知らない人でもわかりやすく楽しい会だったと思う。
- * 今回は知人から教えてもらったが、テレビの CM などでの発信するなど身近な媒体で知る機会が必要だと思った。みんなが共生社会を作り出すために、行政と民間が本気の行動をとることが必要だと感じた。
- * 改めて、障がいのある方々のことをどれだけ考えた取組をしてきたかと反省することが多かった。意識しなくても、自然に障がいのある方々のことを考慮した行動や取組ができること、それが当たり前の社会にしていけることが大切だと実感したコンファレンスであった。

8 成果と課題

(1) 成果

- 今年は、県内の取組にスポットを当てた内容であったが、県内団体活動紹介でスライドショーを流すなど、多くの団体を紹介することができ、県民への発信という目的に迫ることができた。
- 今回コンソーシアム協議会の3地区からの経過報告があり、「当事者×学生」「民間団体同士、民間団体と行政」「実践 × 想い」とそれぞれの視点に当てた取組を報告することができた。
- 計画段階でオンライン開催を想定していたため、急な感染拡大にも対応することができ、また、遠方からの参加や、普段このテーマに関わりの少ない方も参加者していただけた。

(2) 課題

- 昨年度の反省を踏まえ！時間短くしたが、トークセッションなど内容を深めたいものもあり、開催方法も含め検討が必要である。
- より多くの方へ「共生社会」のテーマを周知する方法について、さまざまなメディアを活用するなど、情報発信の在り方を検討する必要がある。

